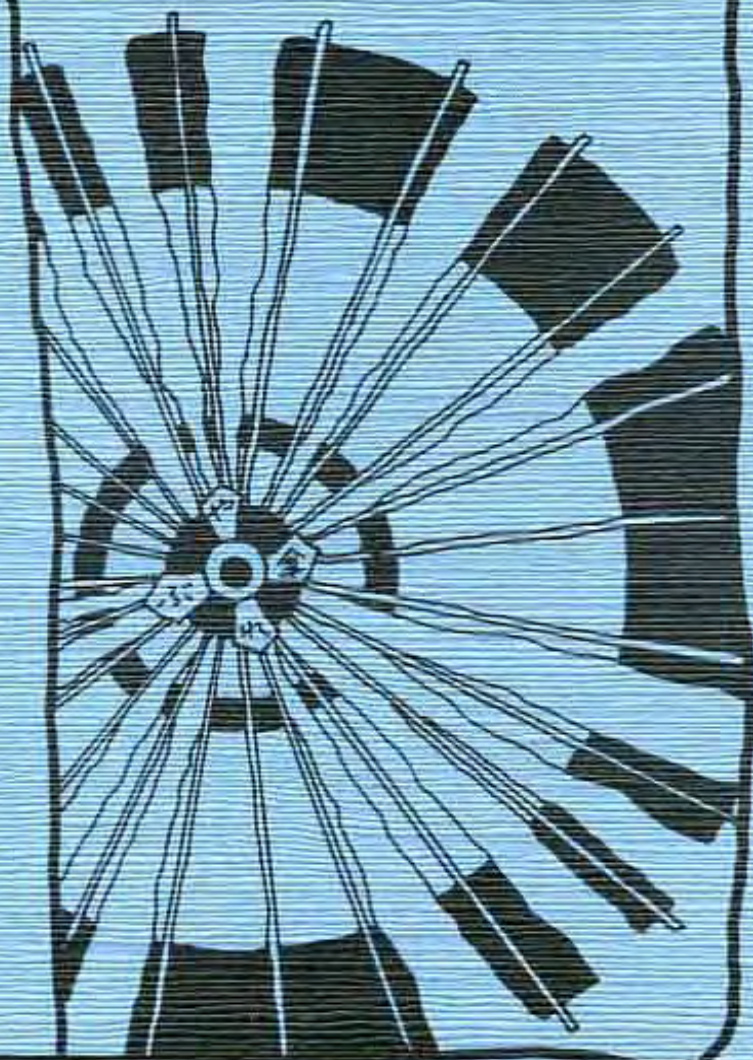


# やぶれ傘

九十七号

二〇一七年八月



釣れさうな川にまた会ふ竹煮草	根橋宏次	馬鈴薯の花猫車前のめり	大島英昭	金魚一匹外の空気を吸ひに浮く	きくちきみえ	リノックより紐垂れてゐる日の盛り	丑久保 勲	片陰に立ちて銀座の待ち合はせ	廣瀬雅男	六疊に電気蚊取りの灯がひとつ	青谷小枝	左岸 一面十葉の花の白	藤井美晴	バラソルを閉づる女の渡船客	白石正躬	何と無く旗に誘はれ心太	瀬島酒望	潮騒のふつと消えゆく簾寝椅子	安藤久美子	畦道に陣の広がり揚羽蝶	渡邊孝彦	終点に留まるバスや麦の秋	天野美登里	夏の風邪喉を伸ばして月を見る	小山陽子	唐寺の低き土塀や白牡丹	秋山信行	紅花の斐にあふるる蕎麦処	菊池洋子
----------------	------	-------------	------	----------------	--------	------------------	-------	----------------	------	----------------	------	-------------	------	---------------	------	-------------	------	----------------	-------	-------------	------	--------------	-------	----------------	------	-------------	------	--------------	------

抄 集 句 傘 紀 大 綺 夫 選

あやとりの橋が暮に夕端居	有賀昌子	坂登る緑蔭あれば休みつ	松村光典	山開き同じ背文字の法被きて	安齋正藏	宵祭り屋台の裏に発電機	石塚清文	田仕事の田にゐて嬉しほととぎす	石原健二	電子音に返事して立つ夕薄暑	岩藤礼子	散骨は南風に揺られて羽田沖	奥田温子	電柱の片陰にゐてバスを待つ	黒澤次郎	金魚玉吊るす草加のせんべい屋	齋藤朋子	夏帽子にぎりつぶして声援す	高橋 均	浮子びくり動く利那の糸蜻蛉	萩原溪人	県警の楽隊を見る木下闇	萩原久代	席に着き小さく登む夏帽子	武藤節子	どくだみを小瓶に挿してキツチンに	森 美佐子	梅雨満月赤々昇るピルの上	山本久枝
--------------	------	-------------	------	---------------	------	-------------	------	-----------------	------	---------------	------	---------------	------	---------------	------	----------------	------	---------------	------	---------------	------	-------------	------	--------------	------	------------------	-------	--------------	------

十 薬

渡邊孝彦

鉄塔を囲む金網葛若葉  
初夏の出店に柘植の曲げわっぱ  
畦道に罅の広がり揚羽蝶  
五月雨や団地のバイク野ざらしに  
十薬や鎮守の杜の長き礎  
黒南風に大きく揺れてブラシの木  
道すがらアガパンサスのよき背丈  
夏<sup>なつ</sup>暁<sup>あけ</sup>や妻のブラウス干し竿に  
駅前で客待つ空車日の盛り  
向日葵は小さき鳥居を越す高さ

麦の秋

天野美登里

雨雲を近くに朝の梅ちぎる  
終点に留<sup>とど</sup>まるバスや麦の秋  
山ぐみの花のこぼるる停留所  
畑隅に屈んでゐたる夏の雉  
浜木綿の花や日照雨のあがりゆく  
夏椿いち枚岩のかかる橋  
草取りや正午のポーとにぎり飯  
バス停はペンキぬりたて夏蕨  
巴里祭の長崎の夜は星流れ  
素麺をまく帯紙をほどきけり

キャベツ

小山陽子

またしてもキャベツの芯にあるえぐみ  
黒南風や鳩と雀が同じ群  
少年の舐める氷菓の青き色  
汗ばむや人の時計で見る時間  
靴下の跡が溽暑の足首に  
昼寝覚ぬひぐるみにもある微熱  
夕風やビルだけ浴びてゐる西日  
文具屋の中も酷暑でありにけり  
本の香を嗅ぎに本屋へ夏の暮  
夏の風邪喉を伸ばして月を見る

白牡丹

秋山信行

青しぐれ山ふところに観世音  
バトン手に子は走りゆく夏の雲  
帰りしな葛餅つまむ茶屋の縁  
土塀の日暮れて烏瓜の花  
夕菅や渡り廊下を風のぬけ  
ぐづる子にそら豆の莢剥くことに  
門灯のともりて月見草がゆれ  
赤紫蘇を残して終はる草むしり  
唐寺の低き土塀や白牡丹  
水槽の網目を抜けて布袋草

紅花

菊池洋子

回覧板木香ばらの垣根越し  
紅花の甕にあふるる蕎麦処  
暮れきらぬ空に鴉や薪能  
柿の花こんな落ちて又落ちる  
突き出し器添へて茶店の心太  
庭先の鉄砲百合はこちらむく  
束の間のこもれびをゆく梅雨の蝶  
地下道を抜けきて海辺大夕焼  
短夜の先客のぬる露天の湯  
将棋盤かかへてくる子夏座敷

夕端居

有賀昌子

きしきしと子等に曳かるる古神輿  
缶詰の桃に種なし三鬼の忌  
ホチキスの閉ぢる音する夏の夜  
あやとりの橋が箒に夕端居  
ネクタイを手品のやうに結ぶ初夏  
門灯に探す呼び鈴風知草  
主逝きアガパンサスの花咲いて  
奥座敷に座り込みたる西日かな  
削り節ゆるりとくねる冷奴  
日の盛り不協和音の管楽器



郭 公

松村光典

水無月の半月眺めバスを待つ  
子雀が水遊びする雨上がり  
大輪のあぢさゐ道に寝そべつて  
ミニトマト脇芽を刈りて次を待つ  
春蟬と鶯が鳴く八ヶ岳  
ぴしぴしり基盤を鳴らす梅雨の夜  
甲斐駒を眺つつ酌む梅雨晴れ間  
郭公が鳴きををり八ヶ岳麓  
坂登る緑蔭あれば休みつつ  
梅雨明けとテレビが報じ空を見る

浅嶋肇

石 仏 の 並 ぶ 札 所 や 著 莪 の 花  
 山 鳩 の 声 の く ぐ も る 梅 雨 入 り かな  
 逆 上 が り 子 に 教 へ る 梅 雨 晴 間  
 よ く 笑 ふ 乙 女 ば か り や 心 太  
 夕 焼 の 中 へ 出 て ゆ く 漁 り 舟  
 あ ん み つ や 切 子 の 皿 の 虹 色 に  
 行 き 交 へ ば 揺 れ る 吊 り 橋 山 法 師

安齋正蔵

薰 風 や 胸 を は だ け て 一 休 み  
 本 棚 の 前 の 立 読 み 半 夏 生  
 山 開 き 同 じ 背 文 字 の 法 被 き て  
 夏 座 敷 一 陣 の 風 吹 き ぬ け て  
 夏 座 布 団 枕 に か へ て 昼 寝 す る  
 暑 し 暑 し と 身 振 り 手 振 り の 石 工 た ち  
 日 盛 り を ニ ッ カ ボ ッ カ が 威 勢 よ く

石塚清文

宵祭り屋台の裏に発電機  
ここからは白き小道やえごの花  
アヤメ咲く畑の向うを路線バス  
小上がりはすでに満席青すだれ  
床上は裸電球よしず掛け  
塗り壁の巢よりくちぼし燕の子  
菖蒲園色とりどりの傘の波

石原健二

いも植ゑて畑は早くも葎にて  
蛇穴を出でてしばらく世を探り  
暇告ぐ時を忘る夏はじめ  
分葉の進む青田の風やはら  
田仕事の田にゐて嬉しほととぎす  
刈りあとの麦の茎浮く代田かな  
日数過ぎ青田は鷺の脛かくし

暇だから鉢の目高を数へゐる  
そんなにも落ちんでおくれ柿の花  
玉ねぎを薄刃で切りてかつお節  
どくだみの整然と咲く空き家かな  
いよいよとうとひねもす金魚金魚玉  
荒梅雨や河は危険とカツパの絵  
八重咲の十葉もらひ来て植ゑる

泉 一九

裏庭の十葉の花一面に  
植込みにすらすらの花列をなし  
庭先の何処にゐるのか蝦蟇の声  
朝の散歩富士山の方より青田風  
青田道進入禁止の立て札が  
夏なつの山間の禁止の立て札が  
夏あの山間の禁止の立て札が  
夏至の日の圏央道で常総へ

伊藤 更正

稲田延子

人住まぬ別荘多し著莪の花  
朝涼し木の葉浮かべる露天風呂  
高原の轍の道の夏の薊  
芋の露集めて星に願ひ書き  
おぶつた子の指差す先の螢かな  
噴水の飛沫の中で遊ぶ子ら  
小糠雨薔薇に水玉残しけり

岩藤礼子

背景の濃き絵を選ぶ梅雨入前  
角の店消えて明るく梅雨に入る  
さくららんぼいとこ同士はすぐ馴れて  
案じ顔して外を見る梅雨の犬  
半夏雨浅間さまの花火ドン  
電子音に返事して立つ夕薄暑  
パンダ柄のパンダとなりぬ梅雨晴間